

## “Mistresses and Handmaidens: Intimate Labor in Imperial Circuits” 愛人そして侍女—帝国回路内での親密な労働—

ヴァーナデット・ヴィキュナ・ゴンザレス (Vernadette Vicuña Gonzalez、ハワイ大学アメリカ研究  
 学科教授)

知花：二人目の講演者のヴァーナデット・ヴィキュナ・ゴンザレス先生は現在ハワイ大学マノア校アメリカ研究学科の教授で、同大学のオナーズプログラムのダイレクターも務められております。先生はカリフォルニア大学パークレイ校にてエスニックスタディーズの分野で博士号を取得されており、ご研究では観光と軍事主義、フェミニスト理論、ポストコロニアル理論など、アジア太平洋に焦点を当てた文化研究をご専門とされています。著書に、デューク大学出版より *Empire's Mistress: Starring Isabel Rosario Cooper* や *Securing Paradise: Tourism and Militarism in Hawai'i and the Philippines*、そして共著に *Detours: A Decolonial Guide to Hawai'i* など数多く執筆されております(下略)。



※以下、講演者の許可を得て当日の報告用ペーパーを翻訳したものを収録（知花愛実訳）

この発表では、帝国を支える重要な労働形態としてのインティマシー（親密な関係性）を考察する。20世紀初頭の太平洋におけるアメリカ帝国の試みは、多大な支援を必要とした。それ以前の帝国と同様に、遠くから他者を支配する範囲と規模は、様々な関係者（軍人、教師、官僚など）による恒常的な労働、インフラ（道路、軍事基地、学校、統治、法的構造など）の整備、そして思想（博愛、無垢、文明、安全）の流布と普及を必要とした。

特に親密さ（インティマシー）について話したい。思想、人間関係、仕事の種類などに示される親密さは、帝国の生活を円滑に運営し維持するのに役立った。今日は、20世紀前半の米比関係で展開された親密さの二つの側面について触れる。第一に、愛とロマンスによって展開された親密さは、アメリカ帝国の望ましさのイデオロギー的、感情的な枠組みを提供した。第二に、アメリカがフィリピンを占領していた時代に、フィリピン人女性を中心に担われた愛情こもった労働と介護の仕事を通じて築かれた親密さが、帝国と植民地の結びつきを強める関係を生み出した。

私の著書 *Empire's Mistress: Starring Isabel Rosario Cooper* を参照しながら、親密さ、セックス、ファンタジー（空想）の行為が植民者の冒険が依存していた帝国ロマンスの一端をどのように担ったかを分析する。この本は、フィリピン人とスコットランド系アメリカ人の混血で、[ショー・ビジネスの] ボードビル兼映画女優のイザベル・ロザリオ・クーパーを中心に書かれている。彼女は、ダグラス・マッカーサー将軍の若くてとても美しい愛人として知られている。アメリカ占領下のマニラで、白人アメリカ人の父とメスティーサ（混血）フィリピン人の母の間に生まれたイザベル・クーパーは、初期のマニラのエンターテインメント界でボードビル役者や映画女優として名声と悪評を得た。20歳の頃、マニラに駐留していたダグラス・マッカーサーに出会い、彼に付いて来るよう説得され、翌年、彼が[当時のアメリカ合衆国大統領] フーヴァーにより陸軍参謀総長に任命されるのを待ってからワシントンに行く。マッカーサーは彼女より30歳年上だ。二人は5年間不倫関係にあり、彼はオフィス近くのホテルにある愛の巣に彼女を住ませた。不倫関係がうまくいかなくなると、二人は辛辣に別れる。その後、彼女はワシントンD.C.に拠点を置く弁護士と結婚するが、第二次世界大戦勃発直前に、彼の元を去

り、中断していたキャリアを復活させようとハリウッドに向かう。二度の短い結婚と13回のわずかな映画出演、ナイトクラブの役者としての長い活動を経て、イザベル・クーパーは1960年に自ら命を絶った。

本の中で私は、マニラからワシントン、そしてロサンゼルスまで、アメリカとフィリピンの植民地関係を背景に、彼女の生涯を物語っている。マッカーサーの軍事任務と権限、クーパーがアメリカのエンターテインメント文化を熟知しそれに関わっていること、占領下のマニラのコスモポリタンな風景、太平洋を横断する蒸気船など、クーパーとマッカーサーを同じ回路に引き込んだ条件は、権力の表現であると同時に象徴でもあり、より私的なスケールで影響を及ぼしていた。アン・ローラ・ストーリーは、これを親密さのマイクロ政治と表現している<sup>1</sup>。

私の著書では、クーパーとマッカーサーの関係を東の間の情事やロマンスとして描いたり、噂やゴシップ、風評によって再現されるものの淫らな詳細をさらに掘り下げたりするのではなく、彼女の人生のわずかなアーカイブではあるが、彼女が親密な関係をいかにしてやってのけたのかを理解しようとしている。なぜならそのような親密な関係は、トニー・バラントインとアネット・バートンが「(帝国が)依存する資源、地代、労働力を生み出す社会秩序」と表現するものに寄与したからである<sup>2</sup>。ロマンスや恋愛ではなく、労働としての親密さを理解し、再検討することで、アメリカ植民地時代のある特定のフィリピン人女性の禁断の移動とそのルートをたどり、この種の仕事の経路、機能、可能性を考察する。イザベル・クーパーと彼女のような女性たちにとって、家事や接待、相手をもてあそぶことから誘惑すること、セックス—それが「本物の」ロマンスを伴うかどうかは別として—、愛情や魅力の表現など、さまざまな親密なつながりや関係性を維持することは、一方では帝国の男性の私的・社会的ニーズに応え、世話をするという労働であり、急速に変化する植民地社会で自分自身が生き残るための手段でもあった。

帝国における仕事としての親密さという考えは、イザベル・クーパーの物語が現代の私たちに伝わる伝わり方に現れている。彼女が注目されるのは、使い古されたジャンルである悲劇的なロマンスのなかである。この物語—それは時間とともに固定化した物語であるが—によると、イザベル・クーパーは若い混血のフィリピーナであり、パワフルな白人兵士の軌道に絡め取られた。二人の激しい情事は、少なくとも彼女の側では、彼女の報われない愛が彼女を自殺に追いやったという絶望とともに、悲劇的に終わるのが常だ。これが私とイザベル・クーパーとの関係の始まりであり、それは、常にマッカーサーと絡み合っていた悲劇的でロマンティックな物語の終わり方だった。この話は繰り返され、マッカーサーについて書いた人たちが、さらには彼女について書いた人たちにも大切にさえされてきた。

植民地主義のアリバイとしてだけでなく、コロニアルなジャンルとしてのロマンスの永続性は明らかであり、イザベル・ロザリオ・クーパーは概してその範囲内で語られている。愛という考えは、占領と帝国主義の暴力を弱めているように見える。この場合の暴力とは、地方を荒廃させ、何万人もの命を奪った実際の戦争や平定作戦などのことだ。愛を喚起することは、同意と相互の欲望を前提とし、さらにはそれらを活性化させ、この行為におなじみのジェンダー化され、性的な帝国関係の輪郭を引き出している。クーパーとマッカーサーの関係をロマンスや愛かのように主張することは、彼女らの関係が依存していた植民地世界における深く非対称的な権力関係を覆い隠す。それが誘惑の鍵となる部分である。

つまり、植民地世界におけるロマンスというこの考えが世界を作る力を持っていたのである。この考えは帝国主義的な欲望を掻き立て、物質的な暴力を覆い隠している。たとえスキャンダルに仕立て上げられたとしても（実際、それは年齢差や異人種間の関係に焦点が当てられ、別の関連する影響を持ち、帝国のより大きなスキャンダルから逸れた）、植民地のロマンスという考えに支えられた愛の労働は、

1 Ann Laura Stoler, *Carnal Knowledge and Imperial Power: Race and the Intimate in Colonial Rule*. Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press, 2012: 19. 以下も参照。McClintock, *Imperial Leather: Race, Gender and Sexuality in the Colonial Context*. New York: Routledge, 1995.

2 Tony Ballantyne and Antoinette Burton, "Introduction: The Politics of Intimacy in an Age of Empire." in *Moving Subjects: Gender, Mobility and Intimacy in an Age of Global Empire*, eds. Tony Ballantyne and Antoinette Burton. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 2009: 5.

帝国プロジェクトにとって極めて重要である。ロマンスの考え（特に失敗したもの）を通して、莫大な死者を出しながらも、帝国を好ましいもの、美しいものにさえする。イザベル・クーパーの物語は帝国の醜悪さを覆い隠す。それは帝国のロマンスが望ましい物語だからである。

第二に、この物語の中で親密さが現れるのは、帝国のコンタクトゾーンで築かれた関係を通じてである。それは、アメリカがスペインと戦争をし、次にフィリピンと戦争をし、長期にわたって諸島を占領すると決めたことで可能になった親密さである。旧世界のヨーロッパ帝国による占領から新しく近代的な支配へと急速に移行する状況下で、フィリピン人は多様で不可解なやり方で展開される勢力の社会的変化に直面していた。アメリカ帝国の明らかな人種階層（ヒエラルキー）があるにもかかわらず、日常の植民地生活において、異人種間の親密さはタブーではなく、権力関係がしばしば交渉され、時には覆される場であることは明らかであった。

フィリピンとアメリカの家父長制が二重になっている場合には、フィリピン人女性はしばしば、19世紀後半のスペイン時代からあるフィリピン人女性の性行動に対する懸念と、アメリカの植民地支配によってもたらされた新しい社会の接触領域を満たす異人種間の親密とに直面した「二つの帝国との親密な交差点」をうまく切り抜けなければならなかった<sup>3</sup>。仕事としての親密な関係は、多くのフィリピン人女性が利用できる手段であることが多く、その多くは暴力によって強制されたり、または暮らし向きによって導かれたりしたものであった。

マニラの都市の近接さは、ネイティブと植民者の間に異人種間の親密さ、交流、そして禁断の関係を生み出した。フィリピン人とフィリピン人女性は、植民地生活の従属的なものとして植民者のために住居をかまえ、使用人、料理人、洗濯人としての日常生活の快適さを提供したり、交際や性交を通して援助や、娯楽、快楽を提供したりした<sup>4</sup>。このように、アメリカ軍兵士は地方でゲリラと戦っていたにもかかわらず、コンサートやダンス、食事などの組織的な活動でフィリピン人と付き合い、フィリピン人の「ホスト」と交わり、歓迎を受けたことに感謝していた<sup>5</sup>。フィリピン・アメリカ戦争のこの時期（1902年の公式終了日以降）には、米軍が部隊内の性感染症を制圧するために売春を規制する事業があった<sup>6</sup>。言い換えれば、植民者の試みは、帝国が規律しようとした異人種間の親密な関係性を生み出し、フィリピン人女性はしばしば不利な立場に置かれた。マニラにいたアメリカ人の独身男性は、キャバレーから売春まで、街の禁製の娯楽によくもてなされた。元兵士でフィリピン人と結婚したジョン・キャンソンが所有していたサンタアナ・キャバレーは、市内と路面電車で結ばれていた。このクラブは戦略的に幅広い客層を狙っていた。白い囲い柵の片側には高級将校や政府管理者のために晚餐ができるリネンのテーブルクロスを敷き、反対側では、癒やしと女性との交際を求める軍人の独身者が一曲料金制で待機しているフリーピーナタクシーダンサーと踊っていた。

他にも合法的あるいは正当に認められた親密な関係があり、それが白人アメリカ人とフィリピン人の間の社会的・人種的な境界線を維持しようとする多くの植民者にさらなる不安を与えた。そのような親密関係にあった一組が、帝国のはざままで出会ったイザベル・クーパーの両親だった。ウィスコンシン州出身の白人兵士アイザック・クーパーは、1898年の米西戦争勃発を機にフィリピンに渡った。彼はアメリカ中西部出身の多くの若者と同様に、アメリカの男らしさを誇示できる最後のフロンティアで自身自身を証明する機会に奉仕するよう招集されたのだ。セオドア・ルーズベルトはこれをロマンチックな帝国の試みと表現している。米西戦争が速やかに終わった後、これに続くフィリピン・アメリカ戦争とその結果としてのアメリカによる占領の期間までアイザック・クーパーはフィリピンに留まることにな

3 Denise Cruz, *Transpacific Femininities: The Making of the Modern Filipina*. Durham and London: Duke University Press, 2012: 73.

4 Julius Bautista with Ma. Mercedes Planta, "The Sacred and the Sanitary: The Colonial Medicalization of the Filipino Body." in *The Body in Asia*, eds. Bryan S. Turner and Zheng Yangwen. Oxford and New York, Bergahn Books, 2009: 157.

5 Winkelmann, "Dangerous Intercourse," Kramer, *The Blood of Government*, 105.

6 Paul Kramer, "The Darkness That Enters the Home: The Politics of Prostitution during the Philippine -American War." In *Haunted By Empire: Race and Colonial Intimacies in North American History*, ed. Ann Laura Stoler. Durham: Duke University Press: 366-404.



った。除隊後は米国公務員の消防士として働いたが、マニラでの生活でフィリピン人と親しくなり、その中にジョセフィーナ・プロタシア・ルービンという若い女性がいた。ジョセフィーナ・ルービンは、ラグナ地方出身の三人の孤児姉妹のうちの一で、結婚して貧しい関係から解消されることを望んでいた。少なくとも姉妹のもう一人もアメリカ人と結婚した。

アイザック・クーパーのような地位のアメリカ軍人や民間人は、フィリピン人女性や、時にはフィリピン人男性と様々な取引をした<sup>7</sup>。子供が関係している場合でも、ほとんどはカジュアルで一時的なものだった。しかしアイザック・クーパーは、人間関係に関しては誰にも劣らず真面目だった。ジョセフィーナ・プロタシア・ルービンは、アイザック・クーパーより20歳年下で、彼と結婚したときはかなり若かった。彼女は貧しくして結婚生活に入り、すぐに彼の子を産んだ。彼女は彼のために家を守り、代わりに彼は彼女とその家族を支えた。

二人の間に生まれたイザベル・ロザリオ・クーパーは、フィリピン諸島におけるフィリピン系アメリカ人混血の第一世代だった。彼女は占領していたアメリカ人と植民地化されたフィリピン人との親密な取引の証拠を体現していた。イザベル・クーパーの両親は正統な夫婦関係を結んでいたが、そのような関係もまた、フィリピン滞在中のさまざまな植民者人士に感情的そして性的な充足感を与えていた親密な行為の織りなす綾の一部であった。これらの関係は帝国を正常化し、コンタクトゾーンでの日常生活の現実に同意の場を作り出した。こうした親密な関係を労働の一形態として理解することによって、それが歓楽街で行われたものであれ、家庭の親密な空間で行われたものであれ、金銭で支払われたものであれ、家庭生活の快適さと安全性と引き換えに支払われたものであれ、親密な関係を植民地の社会をひとつにまとめていた重要な行為や取引として見ることができる。

親密な労働の三つ目の例は、アメリカがフィリピンを長期にわたって占領していた時代の兵士たちの心のケアと娯楽である。この「レスト&レクリエーション」的な仕事は、イザベル・クーパーの母親が関わっていた種類のものとは異なる。なぜなら、それは快楽と娯楽の労働として普遍的に理解され、保証されていたからである。10代のイザベル・クーパーは典型的なミリタリーエンターテイナーであり、彼女の役作りと舞台での演技は特に効果的であった。彼女が無邪気でありつつ性的欲望を起こす存在として、海外赴任者の記憶に懐かしく思い出されるのは偶然ではない。ボードビルの舞台では、若々しくかわいらしい魅力で彼女は「えくぼちゃん」の愛称で親しまれた。これは私が研究の過程で最初に学んだことの一つであり、アメリカ植民地時代の人物ルイス・グリークの記憶を通して屈折したものであった。アメリカ人グリークが独身時代過ごしたマニラで、早熟で若々しい「えくぼのクーパー」は「無邪気かわいらしく」、最前列にいるアメリカ海軍の騒々しい歓喜に合わせてステージをゆっくりと横切る姿を記憶している。当然のことながら、グリークのマニラでの生活の記憶には、独身者が旅行中に見つける他の種類の娯楽も含まれている。

ボードビル女優のえくぼちゃんは、刺激的な純真さを磨くために努力した。彼女の代表的なパフォーマンスの一つで、彼女はティン・パン・アレーの歌「誰か私のネコちゃんを見かけたかしら？」の歌詞を口ずさむ。この歌は、自由を求める船乗りたちの熱烈な想像力に火をつけた。「私は一晩中座ってため息をついている／だって、アパートではひとりぼっちだから／ネコちゃんおいで、ネコちゃん、ネコちゃん、ネコちゃん／いいねネコちゃん、ネコちゃん、ネコちゃん／誰か私のネコちゃんを見かけたかしら？」グリークは、彼女が「私の寂しいネコちゃんを見つけるのを手伝って、彼女がひとりぼっちで寂しいのはわかっているわ」といたずらっぽく誘い、このパフォーマンスを見た船乗りたちが「ヒューヒューと歓喜の声をあげていた」ことを特に覚えている。この歌とボードビルの舞台で、10代の彼女が作り上げた表向きの役作りは、植民地時代のマニラで「彼女のような女性たち」が果たした特別な役割を象徴している。

これには手間がかかった。イザベル・クーパーは純潔ではなかった。マニラの舞台に出演した俳優で純潔の者などいなかったが、彼女は確かに植民者の男たちの欲望をうまく利用して、自分にふさわしい

7 Mendoza, *Metroimperial Intimacies*.

パフォーマンスを作り上げた。マニラの高級ボードビルの舞台では、コーラス・ガールは五万といた。えくぼちゃんは、ステージ上のポジションを争う有望なコーラス・ガールの中で、一番才能があったり美人であったりするのが自分であるわけではないことを知っていた<sup>8</sup>。彼女が駆け出しのとき、マネージャーは彼女を他の女の子たちと特に区別しなかった。彼女はコーラス担当で毎晩下積みの苦勞をしていた。彼女が舞台活動が続けるためには、舞台の独自の才能を磨く必要があった。イザベル・クーパーは、サヴォイとリヴォリの舞台の過酷な環境で、ボダビルという自国で生まれたボードビルの芸を学んだ。一日二回のスケジュールこなし、骨の髄まで働いただけでなく、「毎晩歌い、踊り、身悶え、くたくたに疲れながらも」パフォーマンスをするための体力づくりもした<sup>9</sup>。要するに、この親密なエンターテインメントの労働を行うには多大な労力を必要としたが、それ以上に大きな労力を必要としたのは、彼女は約束された愛を大衆に届けなければならなかったからである。

この場合、親密な関係の労働を通じて彼女が切り開くことができたチャンスは、彼女に名声と富をもたらした。イザベル・クーパーは、自身が（異人種間の親密な関係の産物として）混血であることを利用して、接近しやすいフィリピン人女性と、か弱い白人女性とからなる捻れた性的魅力を、舞台の仕事と成功しつつあるキャリアに取り入れた。フィリピン人女性の女性らしさに心奪われていた歴史的な時期に、イザベル・クーパーはその無邪気な演技を典型的な現代アメリカの純情娘役で演じたために、話題をさらうことになった。若くモダンなえくぼのクーパーは、アイデンティティと直面しているマニラで、フィリピン人女性の新しい表象となり、将来有望で憂慮すべき女性の理想となった。そのおかげで、フィリピン映画界の黎明期における現代フィリピーナ／アメリカン美女の顔となり、マニラの舞台という地域性を超えて活動範囲を広げた。

兵士たちをもてなす仕事を通して彼女はマニラ首都圏のローカルな舞台を越えて、島全体の劇場へと進出した。えくぼちゃんは、フィリピンの無声映画のいわゆる 1920 年代の栄光の日々にふさわしい場所に、ふさわしい顔で、ふさわしいタイミングでいた<sup>10</sup>。ハリウッドから戻ってきたばかりの若くカリスマ性のある野心的な監督ピセンテ・サランビデスは、彼の映画 *Miracles of Love* にモダンなルックスの若い女性を求めている<sup>11</sup>。彼はこの映画に野心を抱いていた。それは、テンポの速いモダンなロマンスとしてのフィリピン製ハリウッドの先駆けとなるものだった。恋愛対象となる役に、ペースの速いモダンな女の子を必要としていた。混血のルックスとアメリカン・ティン・パン・アレーのレパートリーを持つイザベル・クーパーは、まさにその条件を満たしていた。イザベル・クーパーとしては、彼女の無邪気でキュートな舞台演技を変え、ロマンティック・コメディの女性主人公に起用され、現代のフィリピン系アメリカ人女優「エリザベス・クーパー」を世に知らしめた。歌やダンス曲による発声や表現に慣れてきた彼女は、歌詞や生伴奏なしで無声映画を通じた感情の伝え方を身につけた。また彼女は、すばやく動くカメラと監督の厳しい視線に自分の表情を合わせ、観客の即座の反応ではなく、長いストーリーラインに沿って役柄を成長させることを学んだ。

（フィリピンで初めて、そしておそらくアジアでも初めての）先駆的なキスシーンから生じたスキャンダルの批判に耐え、彼女はよりたくましくなった。ステージ上で観客からいやらしい目つきで見られることには慣れてきていた一方で、画面上のスキャンダルは全国的なものだった。彼女が世間で名声を得たり、この場合、悪評を得たりするにつれ、ゴシップ記事などを通じて自分への関心を高め、維持しようとした。エンターテインメントにおける愛の行為であるキスは、イザベル・クーパーのレパートリーにおける親密さの労働の一部であった。上陸休暇の「船乗り」たちの歓声を浴びたステージ上での色目を使った演技のように、彼女の映画作品、特にこの役とこのシーンは帝国台帳（に登録された米兵たち）に効果的であった。

私の著書では、キスとその結果としての映画の見せ場は、（一種の歪んだ愛）のスキャンダルを生み

8 Domingo, "Bare Knees."

9 Soriano, "The Dancing Girls," 45.

10 Nick Joaquin, as quoted in Pareja, "Roles and Images of Woman," 47.

11 Pareja, "Roles and Image of Woman," 210.

出し、帝国に尽力するようになったと主張している。スキャンダルに人々は憤慨し（そして興奮した）が、それはアメリカ帝国主義のより大きなスキャンダルから批判的な眼差しをそらす役割も果たした。フィリピン人女性が公の場で親密な関係を持つことに執着することは、フィリピン人の国民意識（ナショナル・アイデンティティ）とその将来への影響に対する道徳的な怒りと不安をかき立てた。しかし、キスをめぐるスキャンダルは、このアイデンティティ危機を引き起こした最も重要な構造的原因を排除し、隠蔽している。それは、フィリピンにおけるアメリカ帝国の継続的な存在である。

イザベル・クーパー自身にとって、そのキスは最終的に彼女のキャリアに貢献した。彼女は雑誌を飾り、より多くの映画を求めていた。最終的に、彼女の知名度と名声が高まり、占領軍の最も重要な軍人の目に留まることになった。1928年にはリヴォリ劇場とサボイ劇場の大看板を務め、熱狂的なファンを集めた。この時点で、ダグラス・マッカーサーは離婚後間もなくフィリピンに戻っていた。彼はフィリピンの軍司令官に任命され、戻ってきていた。イザベル・クーパーとダグラス・マッカーサーは、出会って間もなく交際を始めた。

イザベル・クーパーは自身の母親を通して、社会の周縁にいるフィリピン人女性にとって、アメリカ人男性と交際することの利点を目の当たりにしてきた。この時点で、彼女の母親はアイザック・クーパーから離れ（そして彼をアメリカに残してマニラに戻り）、別の年下のアメリカ兵と交際していた。母親が作ったパターンを繰り返し、イザベルはマニラの自宅で将軍をもてなし始めた。歴史家のキャロル・M・ペティロは「二人の関係は、マニラのごシップでは秘密ではなかった」と指摘している<sup>12</sup>。

私はイザベル・クーパーがマッカーサーと恋愛関係になるこの時期を、彼女が長い間習得してきた欲望の演出であると考えている。しかしそれは、より親密なスケールで実行された。このような家父長制と帝国主義のもつれは、イザベルと彼女の母親のような女性が得られるチャンスを大きく形作った。彼女たちは帝国の仕事に参加し、「愛」の労働はフィリピンにおけるアメリカの植民地支配を維持するために不可欠であった<sup>13</sup>。イザベル・クーパーは、女性が担い、評価されていない労働に依存するアメリカ植民地の男性（および女性）との間の、取引の第二世代であった。

マッカーサーの禁じられた愛人としてのイザベル・クーパーの仕事は、注目に値する側面がある。こうした親密な関係が、帝国の権力のひび割れを示すことをも明らかにしている。ずっと年下の恋人に対するマッカーサーの執着は、彼女に宛てたラブレターに表れている。

「僕の愛は君を包み込み、僕の心の奥深くに刻まれる……愛する君の唇にキスをし、君の柔らかな体を僕の体に押しつけて……思い出が僕を病ませ、僕は気が遠くなるほど君を強く欲している。」

「君が来ると思うととても幸せだ……君の唇と目と足にキスをする……僕の大切な人よ、戻ってきて。そうでないと僕は死んでしまう。」<sup>14</sup>

「彼女は彼の執着の対象、彼の運命の愛人として以外の居場所はほとんどない。それでも、彼の熱い口説き文句、彼女を彼の欲望の小さな空間に閉じ込めようとする彼の決意は、彼らのような帝国の親密関係の足をすくう深刻な心配事を明らかにしている。マッカーサーは、自分のイザベルが無垢で子供のようで、彼の献身の対象であると想像し、望んでいる一方で、彼女がステージで生計を立て、名声を着実に断ち切り悪名を得る女性であることを知っている。彼が彼女に惹かれるのは、彼女の美しさだけでなく、アジア人女性が最初の妻と違っておとなしく従順だと根深く信じているからである。ある程度は、イザベル・クーパーがその役割を演じている。たとえそれが帝国の欲望が矛盾し腐敗に満ちた側面であっても、彼女は長い間、舞台や映画でこの種の役の需要と出番に精通してきた。要するに、権力を

12 Petillo, Douglas MacArthur, 151.

13 Tony Ballantyne and Antoinette Burton, "Introduction: The Politics of Intimacy in an Age of Empire." In *Moving Subjects: Gender, Mobility and Intimacy in an Age of Global Empire*, eds. Tony Ballantyne and Antoinette Burton. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 2009: 5.

14 これらの引用は1976年のNational Enquirerの記事で公開された部分的な抜粋からのもので、情熱的な将軍の軽率な言動を嬉々として披露している。Dan Schwartz, "Passionate Letters Reveal the Sensational Love Affair of 50-Year-Old Gen. Douglas MacArthur—& a 16-Year-Old Filipino Girl," *National Enquirer*, September 21, 1976. この記事のコピーはモリス・アーンストの論文にある。



持つ男のアジア人女性に対する空想が、彼女の職業と社会的地位と相反している。その一方で、彼女の職業は彼がその空想をかき立てるのに役立つ。二人が不倫関係を維持するために必要な精神的な曲芸と、その人種的・性的空想は相当なものである。

二人の関係は、特にイザベル・クーバーの人生がその後どのように語られるかという文脈では、短いものである。イザベル・クーバーが20歳、将軍が50歳の時（そして二人の妻の間）に結ばれた五年間の関係だった。マニラからワシントン、ヨーロッパまで、感傷的なラブレターで記録されており、彼の愛人への執着がうかがえる。これらの手紙はその情熱と長さから、将軍の巨大なエゴや彼女の思いやりと配慮に依存していることと、彼が夢中であることを記録しているが、いずれも時間とともに弱まっていく。二人の関係には明らかに権力の非対称性があったにもかかわらず、彼女は感情の手綱を握り、（ナイトクラブへの外出、ヨーロッパでの部隊視察中のハバナへの一人旅、彼女の家族への援助など）自分の要求をすることを恐れていなかったことがわかる。最も明白なのは、ダグラス・マッカーサーがその価値以上に彼女を面倒だと判断した瞬間に、彼女が彼との関係を値札付きの親密さの取引にまで引き下げてしまうことである。彼らの交際は1934年の5月か6月に衝突して終わる<sup>15</sup>。イザベル・クーバーは、キャッソルドン・ホテルの愛の巣を出て、マッカーサーのオフィスから数ブロック先の下宿に引っ越す。

この瞬間を特に皮肉なものにする全国的に起きた歴史的出来事がある。1934年、アメリカはタイディングス＝マクダフィ法を成立させ、フィリピンの独立を認めたが、同時に、これによりフィリピン人の身分はアメリカ国籍者（US nationals）から変更され、他のアジア人と共に移民排斥の対象となった。アメリカでのフィリピン人移民の経験の特徴づける道理に反した恐怖体験や暴力は、フィリピン人男性が白人女性に接触するかもしれないという脅威から生じている。タイディングス＝マクダフィ法に続いて送還法が制定され、帰国を希望するフィリピン人移民労働者にフィリピンへの片道切符が無料で提供された。

イザベル・クーバーは父親からアメリカの市民権（citizenship）を得ていたが、マッカーサーは彼女をフィリピン人として明確に位置づけていた。彼は、彼女に近づき、手に入れることができ、彼女を必要としなくなったときには見捨てることができた。彼女をそのように利用することを可能にしている論理は、フィリピン人男性に白人女性との交際を禁ずる論理とリンクしていた。彼は別れの手紙にフィリピン行き片道切符を同封した。他のフィリピン人のように、彼女もまた望ましくない存在だということを理解してくれることを願ってのことだった。フィリピンからの労働力が一般的に国家被後見人として見られ、アジア移民排斥法によってできた溝を埋めていたにすぎなかったように、彼は明らかに彼女のことも消耗品のように見ていた。

強制送還法（the Repatriation Act）の失敗に伴って、イザベル・クーバーは他の多くのフィリピン人移民労働者と同様に、留まることを選んだ。母親のように彼女は、自分の目的のために植民者の男性との関係によって開いたチャンスに賭けた。支援もなくホームレスとなったイザベル・クーバーは、執着がもたらした将軍の慎重を欠いた証拠を必要な資源に変えるチャンスを見出した。その年にワシントンで広まっていた不倫の噂について、醜聞を暴くジャーナリストのドリュー・ピアソンが彼女を探し出した。ピアソンはマッカーサーから名誉毀損で訴えられており、イザベル・クーバーに頼んで将軍に訴訟を取り下げるよう説得してもらおうとしていた。イザベル・クーバーはピアソンの弁護士に、彼女に代わって交渉する権限を与えた。手紙の原本と二度と彼に連絡しないという合意と引き換えに彼女は示談金を得た。さらに彼女は、後に彼女の人生で大きな恩恵を受けることになる味方との関係を築いた。ある男性に捨てられた場所で彼女は、すぐに別の男性と仲良くなった。ワシントンD.C.の弁護士と結婚したのである。

彼女の本を書く上での課題の一つは、彼女の物語をマッカーサーの物語から切り離すことだった。明らかになったのは、マッカーサー自身は、彼女の人生を左右する帝国との親密関係の単なる換喩に過ぎ

15 破局の電報は1934年9月11日付のもの。ペティロは1934年9月1日に破局したが、1934年5月にはすでに彼らの関係は悪くなっていたようだ。

なかったということである。たとえ、彼女が様々な親密関係をうまく切り抜けてきたとしても、帝国との親密関係が彼女の人生を左右したことは変わらない。アメリカ合衆国とフィリピンの地政学的関係と親交は、官僚、宣教師、教師、兵士らに依拠していたのと同じくらい、帝国ロマンスをつくる男女関係と空想（ファンタジー）の結合力に依拠していたのである。

イザベル・クーパーの親密な仕事の四つ目の例は、ハリウッドでの空想（ファンタジー）の産出を下支えしたことである。ハリウッドでは、彼女がすでによく知っていた人種化されたロマンスと救済の考えが根強く、ハリウッド映画は帝国主義的挑戦にイデオロギー的、感情的な勢いを与えていた。マッカーサーとの関係が終わった後、イザベル・クーパーは生涯の最後の20年をハリウッドでフリーランスの女優として過ごした。

彼女の人生の最後の三分の一で明らかになったのは、帝国ロマンスの持続力と、それがその時代の彼女の人生とキャリアをどのように形作ったかである。マッカーサーとの関係が終わってから約6年後に第二次世界大戦が勃発した。その間、彼女は結婚したが、うまくいかなかった。そしてハリウッドに向かい、知っている唯一の仕事に賭けることにした。その戦争はハリウッドに利益をもたらした。この時代の映画は、救済と解放の語り口を新しい目的のために再利用し、古いものを再び新しくした。イザベル・クーパーがこの頃に得られた役は、必然的に彼女を祖国での実際の戦争やマッカーサーがその戦域で果たす役割に関連付けることになった。

戦時中のイザベル・クーパーの人生は、帝国の親密さが予期せぬ場所に織り込まれていることを明らかにしている。彼女の私生活の詳細は時々入り組んでいるが（その一部は彼女自身の創造力によるもので）、俳優としてのイザベル・クーパーは戦時中に注目された。このアーカイブが生み出す物語は非常に皮肉でありながらも、すでに馴染みのあるものだ。ハリウッドの新しい脚本の筋書きは、説得力があり、魅惑的だ。それらは、常にアクションの中心にいる白人の武勇伝のメロドラマ的な語り——傷を負いつつも敵を倒す男を描いた叙事詩的な映画——にぴったりの筋書きである。ハリウッドの野心的な混血女優にとって、戦争はおなじみの人種の区分に沿った帝国の欲求を高め、イザベル・クーパーのような俳優の仕事を生み出す<sup>16</sup>。アジア人や混血の俳優の需要は、太平洋やアジアを舞台にした映画に本物らしさを与えるためにますます高まった。

この時期に撮影されたイザベル・クーパーのスタジオ写真は、戦争によって急増したと思われる種の役を真っ向から狙ったものである。彼女はレイに身を包んだネイティブの女の子で、気を引くように微笑み、もてなしている。チャイナドレスを着て、髪に花を飾り、遠くを見つめている。別のシリーズでは、フィリピンの衣装を表すバタフライ・スリーブの明るい色のブラウスのテルノと暗色のロングスカートに身をまとっている<sup>17</sup>。これらの姿は入れ替えができると思われる。

ハリウッドでは、イザベル・クーパーが自身の過去に関わった人物やその背景を描いた映画に出演している。フィリピンは太平洋戦域の重要な場所であり、彼女の元恋人はその中心人物であることから、この時期の彼女の人生は、これらの過去と現在の親密さによって形作られている。開戦時にアメリカの支配下にあったフィリピンは、1941年に真珠湾攻撃と同時に日本軍の攻撃を受けた。フィリピン諸島は深い苦しみと劇的な解放の地として、アメリカ映画の舞台としてよく知られている<sup>18</sup>。アジア太平洋地域における連合軍の作戦で、苦戦しながらも最終的には勝利をおさめた英雄であるマッカーサーは、映画の筋にしばしば現れる。イザベル・クーパーは、ハリウッドで働く女性として、このような過去のエピソードから解放され自立することを模索しているが、この根深い植民地関係は彼女にそれができないことを示している。植民地関係は、彼女のすべり出しの自立の機会を、戦争と帝国との関係が背景に織り込まれた筋書きに結びつけている。

彼女が最初に演じた役のいくつかが、戦争と太平洋戦域におけるマッカーサーの役割を思い出させ続けたのは、皮肉であると同時にチャンスでもある。早い段階で、彼女はフィリピン人看護師を演じ、戦

16 Willis, High Contrast; Parmar, "Hateful Contraries"; Kang, Compositional Subjects.

17 Cheng, Second Skin; Chung, Hollywood Asian.

18 Konzett, "War and Orientalism in Hollywood Combat Film"; Hawley, "You're a Better Filipino Than I Am, John Wayne."



争と撤退のさなかにフィリピンで従軍するアメリカの白人看護師たちのロマンスを中心に描いた映画 (*So Proudly We Hail*, 1943年) に出演している。彼女がハリウッド、特に1940年代で演じることのできる役は、アメリカ人が戦争における自分たちの役割についてよく耳にする空想や、たいていは有色人種の女性についての物語である。アメリカ軍捕虜の裁判を描いた映画 (*The Purple Heart*, 1944年) では芸者を演じ、ワシントンD.C.におけるマッカーサーのオリエンタリズムと着物への執着を思い起こさせる。必然的に、彼女はハーレムの一員としてキャスティングされる。ハーレムとは、彼女が得意としていた西洋の空想を外挿したもので、この場合は、家庭教師と文明というシャムについての空想である (*Anna and the King of Siam*, 1946年)。彼女はまた、使用人や秘書の役を数多く演じた——必見のチャーリー・チャン映画では、皮肉なことに、ここ数年で最も言葉を発する役を与えられている (*The Chinese Ring*, 1947年)。

1950年初頭に演じた彼女の最後の「大役」は、アメリカ人スパイのフィリピーナお手伝いさん (1951年の映画 *I Was an American Spy*) と、パーレスク大学を題材にしたモキュメンタリー [フィクション作品] のハーレムダンサーだったが、それほど大きな違いはなかった。どちらも、アメリカとフィリピンの間の発展する関係を育み続けた特別な愛のファンタジーに基づいていた。これらの役は、数は少ないものの彼女の実際の労働時間の大部分を占めており、彼女に定期的な収入を与える実生活の仕事にぴったりと沿ったものであった。例えば、(1940年代と1950年代のロサンゼルスでは典型的な出し物で) エキゾチックな演出が特徴的なナイトクラブのフラダンサーだった彼女は1949年の『*My Dream Is Yours*』でナイトクラブのダンサー役として「発掘」された。スクリーン上で、またスクリーン外でも、彼女がした仕事の種類を通して、帝国の愛が彼女に可能な仕事を、彼女に適した仕事を作り続ける様の反復を見ることができる。

最後に、この研究の意義について述べたい。ある種の過激な愛の労働、つまり研究者と対象者の間の別の種類の親密さが、イザベル・クーパーのような物語の修正をどのように可能にするかに目を向けたい。イザベル・クーパーの場合、死者は帝国の歪んだロマンスに仕えて生きている。彼女のように帝国の軌道に深く引き込まれ、敵と寝た女性のような「悪い臣民」にはよくあることだが、彼女たちの物語は重要な歴史に貢献するとは考えられていない。

私のバージョンの彼女の物語では、親密さという分析尺度は、規則に従わない創造性豊かなアーカイブを提供する。ただし、受け継がれ大切にしている物語以外の物語のための場所を作ることを私たちが受け入れるのであれば、そしてそれらを帝国の欲望が長らく影響を与えている伝承として理解するようになれば、である。

帝国のジェンダー化された性的権力の関係は、従属者に複雑な人格を与えるために作られたものではない。それは彼女らの価値と用途を定義し、人生の選択肢を減らし、彼女ら自身の欲望と夢を圧制したのである。イザベル・クーパーがそうであったように、それは彼女らを弱体化させた。

彼女の物語を通して、私たちは人々が帝国の範囲内で、時にはそれを超えて、どのように人生を形作ったかをよりよく理解することができると思う。なぜなら、この物語がまさに帝国に縫い込まれており、そしてそれが普通のことであり、時には醜いものでさえあるからだ。

そして、その理解を深めるには、ストーリー豊かな物語を作る方法を見つける義務が残されている。このような物語は、私たちの現在を形作る歴史を理解するのに役立つだけでなく、この世界における私たちの立ち位置や、まだなされてない仕事を理解するのに役立つ。

知花：ゴンザレス先生、ありがとうございます。会場の皆さまから先生にご質問があればお受けしたいと思います。

永野：ご講演ありがとうございます。大変勉強になりました。簡単な質問があります。ダグラス・マッカーサーとクーパーが出会ったのは1928年か1929年でしょうか。

ゴンザレス：だいたいその頃です。彼女はすでにマニラで俳優としての地位を確立していました。

永野：それはマッカーサーが最初の妻と離婚した後でしょうか。

ゴンザレス：はい。

永野：それからダグラス・マッカーサーは2番目の奥さんと再婚しましたが、それは何年ですか？

ゴンザレス：第二次世界大戦の前ですね。第2次世界大戦でフィリピンに戻る30年代後半には、イザベル・クーパーとの関係は終わっていて、彼は船で2番目の妻に出会います。彼が再婚した直後にクーバーは最初の夫と結婚します。

高城玲（アジア研究センター所員）：マッカーサーの資料として手紙が一部出てきたんですけども、一方でクーパーのほうの日記とか資料はどういうものがあるって、どういうふうに分けられたのかお伺いさせていただければと思います。

ゴンザレス：マッカーサーの手紙は彼のアーカイブにはなくて、彼を訴えたジャーナリストの弁護士の手元にありました。だから、彼のアーカイブの人たちは、明らかに彼の手紙を保存しなかったということです。イザベル・クーパーからジャーナリストへの手紙はいくつかあります。彼は一種の仲介者のような存在になったので、彼女からの手紙をいくつか持っていて、マッカーサーについても触れられていますが、1930年代というラブレターがあったような時代のものはありません。彼女の文書の所蔵場所はあちこちに散らばっていて、材料が少ないんです。私は多くのものをつなぎ合わせる必要がありました。